東京 IPO　特別コラム

２０１９年1月２９日　Vol.１３９

2019 年2月のＩＰＯ銘柄

2019 年もはや 1 か月を過ぎようとしている。デフレ脱却には至っていない日本の株式相場は昨年１２月２５、２６日あたりの安値から戻り歩調が見られるが、景気好調の米国株の上昇力に比べるとやや見劣りする。ソフトバンク株の初値割れで揺れたＩＰＯ市場も新規銘柄が２月２２日まで出て来ない中で落ち着きを取り戻しており、多少は強気心理が覆い始めているのが現状と言える。株価の変動を覚悟したリスクマネーの投入の結果がリターンとなって表れるＩＰＯ市場での運用成果は昨年後半の一時的な停滞局面を脱し、着実な戻り相場を背景に向上が期待される。

昨年の２月ＩＰＯは２銘柄に留まったが今年は現在のところ 22 日の識学（7049・マザーズ）を皮切りに５銘柄が予定されている。全体相場次第ではあるが、このペースで今年もＩＰＯ銘柄数は 90 前後に達することが想定される。今年もセクターとしてはシステム系、ＩＴ系が主流となることは想像に難くない。研修、ビジネスコンサル系の識学や総合プロモーション事業を展開するフロンティアインターナショナル（7050・マザーズ）を除く３銘柄（リックソフト、東海ソフト、スマレジ）はソフトウェアやアプリの開発・販売をメイン事業としており、まさにＩＴ系銘柄としての評価が与えられることから人気化が予想される。

それぞれの内容は東京ＩＰＯのサイトで改めてご確認願いたいが、今年最初のＩＰＯ銘柄となる識学については設立が 2015 年の若い企業で直近の業績が急速に向上していることが分かる。同社のサイトを見ると、同社は人の意識構造に着目した独自の理論をベースにした、組織マネジメント理論「識学（しきがく）」を使ったコンサルティングサービスを、企業経営者や経営幹部へ提供し、クライアント企業の組織改革、生産性向上の支援を行っており、働き方改革というキーワードに絡む企業と言える。2015 年の設立から現在（2018 年 10 月時点）までに、上場企業、有名ベンチャー企業、スポーツチーム等、累計 800 以上の企業、団体を支援しているとのこと。ポジティブな評価の一方で上場を前に起きた不正アクセスによる一部のデータ流出問題がＩＰＯに影響しないか留意が必要だ。

これに続くのは 26 日のリックソフト（4429・マザーズ）で、同社は豪ソフトウェア会社アトラシアン社が開発するプロジェクト管理用ツール（全世界で 3500 万人の登録ユーザー）をはじめとしたソフトウェア製品のライセンス販売及び導入支援等を行っており、足下の業績は堅調。更に 27 日には東証２部にソフトウェア受託開発を行う東海ソフト（4430）がＩＰＯ。同社の設立は 1970 年で既に社歴は 49 年にも及んでおり、目新しさに欠けるとの印象。28 日にはフロンティア社とスマレジ（4431・マザーズ）のＩＰＯが予定されているが、日本一の販売データのプラットフォームを有し日本のキャッシュレス化を促進するスマレジへの関心が高まりそうだ。

（東京ＩＰＯコラムニスト　松尾範久）